

ファン歴60年 鷗外の「高瀬舟」(加藤和保)

[おすすめしたい本]

『最後の一句・山椒大夫ほか』

森鷗外／著

夏休みの課題で思い出すのが読書感想文。書くのに苦労はしたが、森鷗外の作品に出会えた。平易な表現で描かれた身分制度下の市井の人々の姿が、中3の僕には驚きだった。

その一冊「高瀬舟」。幼くして両親と死別、弟と身を粉にして働くが家もなく、極貧生活を送る喜助は病に冒された弟に死なせてくれと懇願されて、迷った末に手を下した。遠島に処せられる護送舟の中で喜助は「食べ物にさえ困る毎日だったが牢では食を与えられ、出る時には金子まで頂戴した。これを元手に働けばいい暮らしができる、遠島は苦役ではない」と役人に胸を張って答える物語だ。

必死に生きる喜助に感動して読んだ。役人は彼の頭から毫光がさしているように見えたと言う。弟を殺めた彼を見つめる役人の優しい目にも心打たれた。京都の高瀬川を訪ね、水路のような畔を歩いたのはその年だった。

成人して再読した時は「安楽死」の問題提起に心が震えた。もう助かる見込みはなく、早く楽にしてくれと苦しむ弟を見て、知らぬふりができなかつた喜助。その行為は殺人なのか。役人同様、私も杓子定規の裁定に「腑に落ちぬ」思いが残った記憶がある。

今読んでもテーマは極めて今日的で、明治の作品とは思えない。安楽死が殺人かどうかは別にして、事故や病で死に瀕した時、苦痛緩和だけ施して寿命が尽きるのを待つか、延命装置に頼って少しでも長生きするか。軍医だった鷗外の視点は、医学の進歩を先取りしたかのように思い、改めて感服した。

古希を過ぎた私も選択を迫られる日がくるかもしれない。その際、喜助のように家族を悩ませるのは残酷だ。事前に決めて知らせておかねば、という思いが強くなっている。

鷗外の没から百年になる。庶民の悲哀を描き、時を越えて読み継がれる名作、「山椒大夫」「最後の一句」も、もう一度読もう。鷗外のファンになって六十年目の夏が来る。

非戦への祈り (村上雅子)

[おすすめしたい本]

『あなたはどこにいるのか』

籠原あき／著

この本を友人から勧められて読み、この岐阜県下の農村からも多くの開拓団が、国策として村長の勧めのもと、旧ソ連と満州の国境近くに送られたことを知った。敗戦間際のソ連軍の侵入により、日本軍には捨てられ、男たちは徴兵されていたから、ほとんど女と子供たちでどれほどの辛酸をなめ、引き揚げたかが克明に記されている。私の夫の母や姉妹たちも旧満州からの引揚者、兄は二十歳で戦死、のちに父は中国戦線から生還したが、その経験は語るに辛すぎたか、多くを語ろうとしなかった。著者籠原さんは当時子供であったが、のちに多くの調査を重ね、事実を冷静な筆致で、小説の形で表わされたのがこの本である。戦後の経済社会を若い彼女が、今も続く男尊女卑を受けながらどう生き抜いてきたかも描かれている。不条理、非合理的な社会の中を耐え、生き抜く力にも打たれる作品である。

私も九十一歳、満州事変の年に生まれ、アジア太平洋戦争の終わるまで、軍国少女に仕立て上げられた者である。戦場の悲惨、内地、外地での庶民の惨状を経験しない人々が国民の大多数を占めるようになった。若い人々は老人の戦争経験話を聞いても、またか？という顔をするばかり。

しかし今ウクライナでの戦争を映像として日々目の当たりにし、戦争の実態を知るに至った。ただ恐怖としてそれが我が国も軍備拡張をという大声になることを私は恐れる。私たちは知らされなかったのだ。事実を。事実を知ろう、語ろうとする者は、法の下に弾圧検挙された。治安維持法の制定は一九二五年、戦争が始まるはるか前から言論の自由を抑える企ては始まっていた。いまこそ、「知ることが、非戦への道だ」と叫びたい。軍備拡大は軍拡競争を招き、やがて戦争を勃発させる。それは歴史の事実。その時苦しむのは庶民たちであることをこの本を通して考えてほしい。戦争しない国となるにはどうすればよいかを。

それが私がこの本を推薦する理由である。

人間は悩み、そして成長する (牧村幸)

[おすすめしたい本]

『きょうも誰かが悩んでる—「人生案内」100年分』

読売新聞生活部／著

人生相談が、好きだ。

新聞、雑誌、本には必ず目を通す。

人の悩みは人それぞれ。そんなことが悩みなの？と思うことがあるし、そんなに辛いのにそんなに我慢してらっしゃるの？と思うこともある。

人生相談の回答者は、先生、作家、弁護士などこれもまたさまざま面白い。人の悩みは勉強になったり、自分自身の生きる参考にもなったりする。

今回紹介したいこの本は、今まで多くの現代の人生相談の本を読んできた私が、読んだことがない過去百年分の悩み相談である。

当然ながら私は私が生きている時代しか知らない。昔は良かったと言ったりするけど、それはイメージする昔で、その時代を生きていたわけではないので、はっきりとしたことはわからない。昔の人の人生相談を読んでいたら、辛い時代があったんだと泣けてくるし、またその回答者の方にも優しさが染みる。

特に戦争から帰ってきたら妻が違う人と結婚していた人の悩みと回答には涙した。自分は何という恵まれた時代に生まれたのだろうと思う。百年の間に多様化し、ずいぶん自由な世の中になってきたと思う。

お金がなくて子供を手放さなくてはいけない相談には、何と育ててくださる方が現れて養子になったなど、今では考えられないことが相談の中で成立している。

また、わがままな相談者には厳しく、辛い生活をされていた方には寄り添って優しく、どうにも解決できないことには心から詫びる、そのやり取りが何とも言えずお見事なのだ。

私も、身近な人に相談して、なんか違うなあ、というトンチンカンな回答をされたことがある。私は相談されたらお見事！な回答を出せる人になりたいと思う。

誰か私に人生相談しに来ませんか？と言いたくなる本です。

「すごい、見つけた」(中川チエ)

[おすすめしたい本]

『90歳セツの新聞ちぎり絵』

木村セツ／著

その本は、文章よりも絵の方が圧倒的に面積がある。そして、絵をじっと見ていると、絵の中に、文字がチラチラあることに気づいたりする。

「90歳セツの新聞ちぎり絵」は、木村セツさんという女性が、90歳から始めた趣味のちぎり絵の本である。画材は、全て新聞紙だ。

私が最も感心したのは、「秋」がテーマの「イガグリ」である。栗がピカッと光っているところが、とても写実的である。「ひよこ」も好きだ。ふんわりした毛の感じといい、二羽のひよこが、まるでお話しているような雰囲気といい、この作者が、ひよこを愛おしく思っていることがストレートに伝わってくる。

どの作品も、対象物をよく見ている。そのまなざしは、温かい。

90歳といったら、一般的に言ったら、何かを始めようという年ではない。心身が衰えていくのだから、仕方がないことだ。我家にも93歳の老父がいるが、生きていくだけで精いっぱいのように見える。

だから、娘さんがすすめた言葉に素直にのって、のめりこんで、どんどん制作される姿に感動する。うれしくなる。90歳でも、何かにチャレンジできるんだ。なんて、すてきなことだろうと思える。セツさんは、中高年の星である。

おもしろいのは、子どもの頃は、絵を描くのは「嫌いでした。」と言っていること。こんなん聞くと、楽しくなる。セツさんは、子どもたちの星でもあるな、と思う。さらに、「塗り絵」も「キレイ」だそう。セツさんの創造力は、塗り絵の中には、おさまりきらないのだろう。

被災した時、見て気持ちが安らぐ物を、避難用鞆に入れておくといいと聞いた。私、この本を入れておこうと思う。

老若男女、どんな人が目にしても、必ず何らかの力をもらえる。おすすめです。

いいね！その人生論いただきます（金森由利香）

〔おすすめしたい本〕

『じたばたしても仕方ない』

ひろさちや／著

十年程前まで新聞に連載されていた、ひろさちやさんの「ほどほど人生論」に、こんな話が載っていた。

あるとき、オケラが病気になり苦しんでいました。そこで友達のミミズに医者を呼んできてくれるように頼みました。でも、ミミズは足がないのでそんなに早く医者を呼びに行くことはできません。そこでムカデに使いを頼みました。ムカデは快く引き受けてくれたのですが、ちっとも戻ってきません。ミミズは心配になり様子を見に行くと、まだ百本の足にくつをはいている途中でした。足がなくてもダメ。多過ぎてもダメ。ちょうどいい加減がよい。そして、ちょうどいい加減は人によって違うものである。という話だった。

無理する必要はないと気持ちが軽くなり、その後もたびたび「ほどほど人生論」に救われた。だから、ひろさちやさんの名前とタイトルにひかれ、自然と本を手にしていった。

何か問題が起きたとき、対象・外界・相手を変えることで解決しようとするよりも、自分自身を変えるやり方がよいという。ではどのように変えて、問題を解決すればよいのか。そのヒントとなる話が、この本にはたくさんあった。一つの話が一五〇〇字足らずで、次々に出てくる挿話も興味深い。仏教の教典だけでなく、昔話、エッセー、各国の民話、寓話など、実にたくさんものから引用し、わかりやすくまとめられている。

足が多ければ早く歩けるだろうというミミズの常識がくつがえされたように、今まで常識だと思っていたことを少し違う見方をすることで、新たな発見があるかもしれない。問題が解決できるかもしれない。そんなふうに思わせてくれるのである。

読みすすめるうちに、たびたび既視感を感じていたが、この本は「ほどほど人生論」をまとめたものだった。ぜひ一読して、自分の心に響く話を見つけてほしい一冊である。

歴史を記録する（加納友香）

〔おすすめしたい本〕

『東京大空襲—未公開写真は語る』

NHKスペシャル取材班、山辺 昌彦／著

この本には、今まで公開されていなかった東京大空襲での写真が収録されており、まるで自分が戦時下にタイムスリップしたような臨場感や絶望感、当時の人々の複雑な心情を感じ取ることができる。

東京大空襲は1942年4月18日～1945年3月10日まで続いた大規模な空襲で、被災者310万人以上という大きな被害を日本にもたらしたにもかかわらず、被害の実態はあまり知られていなかった。当時、写真は限られた人しか撮影できず、撮影された写真も大半が政府の検閲から逃れようと、戦後すぐに処分されたそう。奇跡的に残っていた写真を収録したこの本には多くの歴史が記録されている。

収録されている写真は、撮影日の順に整理されており、いつどこで何があったのかを鮮明に私達に語りかける。これらを観ていくと焼け野原となった東京で苦しみながらも前を向いて必死に生きようとする人の姿が見られる。復興の際に撮られた写真では人々の生活に笑顔が増え、協力し合いながら生き生きと働く姿も見られる。

しかし、日本は一方的に被害を受けていたわけではない。太平洋戦争では日本が戦犯と言われているからだ。この戦争はあまりに無謀な戦いだっただろう。なぜ無謀とわかっていながらも戦ったのか。調べると「自国を平和にする」という理由が背景にあった。しかし、アメリカの元兵士は「戦争は被害者も加害者も傷つける。」と語った。両者から見ても、自分たちの幸せだけを考えた戦争は多くの犠牲を生み、人を傷つけるものなのだ。

今日も周りを見ると戦争や紛争で苦しんでいる人が沢山いる。これらに目を向けるためにも、私達の先祖の残した歴史を知るためにも、この本に目を通してみると良いだろう。知識を蓄え、戦争の恐ろしさ、平和の大切さを私達が伝えていく事で、もしかしたら世界を少し変えられるかもしれない。

読書のすゝめ (安藤佐智子)

[おすすめしたい本]

『きつねものがたり』

ヨセフ・ラダ／著

四十五年ほど前、小学生だった私は母と一緒によく市立図書館へ出かけていた。階段の手すりは磨かれたようにピカピカで、薄暗い廊下を歩くとギシギシと音のする木造の古い図書館だった。けれどひとたび児童書の並ぶ書棚に向き合えば、そこは私にとって母との待ち合わせを忘れてしまうほど楽しい場所だった。

その図書館で『きつねものがたり』と出会った。木の枝を組み合わせたような文字の題名も、まじめな表情でポーズをとるきつねの絵の表紙にもワクワクした。

『きつねものがたり』を読み終えたとき、私はどうしてもこの本を手元に置いておきたいと思った。書店で注文しようとしたが購入できない本だとわかる。しかしあきらめきれなかった私は、この本を丸ごと一冊ノートに書き写すことにした。一五七頁もの物語を、小学四年生の私はどれほどの時間をかけて書き写したのだったか？

先日、そのノートを実家で探してみたがみつからなかった。そこで図書館で借りてきた『きつねものがたり』を手に、私は十歳の自分が、この本をなぜあれほど手元に置きたいと望んだのかと不思議に思いながら読み始めた。再会した愉快的さし絵も懐かしかった。

物語を読み終えたとき、私はようやくその理由に気がついた。時には自信過剰とも思えるきつねの自己肯定感や、少々早とちりだけど知恵と工夫でチャレンジする行動力、失敗をきちんと認めて反省する素直な心、ユーモアで自分を取り戻す明るさ…。物語の中のきつねの姿は“生きる力”そのものだった。

あの頃の私は、心の中に芽生えはじめた“自分の力で生きていくことへの漠然とした不安と憧れ”をなんとかしたくて、手元に置いた『きつねものがたり』をテキストにして、きつねから“生きる力”を学ぶつもりだったに違いないと。

「繋がりを探めて」 (林真弓)

[おすすめしたい本]

『正欲』

朝井リヨウ／著

朝井リヨウ。たしか岐阜県生まれで、映画になった本がいくつかあったな。その程度の甘い認識で読み始めた私は、すぐに本を閉じた。甘くない…。この本は甘くない…。

誰かの独白。一つのありふれた事件。そんな文章から始まるこの本は、読み進めるうちに様々な背景が見えてくる。一見、関係の無いように見える人物たちが、どんどん繋がっていく展開に、本を閉じることができなくなっていく。

多様性が叫ばれる現代。登場する人物たちは、そんな現代でも心をさらけ出すことに抵抗をもち、自分の心をひた隠しにしている。だが、どこかで人や社会との「繋がり」を求め、もがいている。生き辛さを感じながらも懸命に社会に溶け込もうと生きる姿は、人間味あふれ、共感してしまう。

そんな、葛藤を抱えながら生きている登場人物たちの「心の動き」、「行動」にどんどん引き込まれていく。

私自身、どちらかといえば、多様性に理解のある方だと思っていた。しかし、この本を通して、自分の想像を超えるものは、思考の選択肢にすらあがっていなかったこと、自分自身が、マイノリティの中のマジョリティにしか理解が及んでいなかったことに気付かされた。

自分の常識の中でしか考えることのできない限り、人と本当の意味で「繋がる」ことはできない。読了後、自分の視野が少し広がった気がした。

みなさんも、ぜひこの本を読んで、想像の先を創造していただきたい。



あきらめない想い、人の心に届けよう (藤川心花)

[おすすめしたい本]

『こころの耳—伝えたい。だからあきらめない。』

早瀬久美／著

もしみなさんが聴覚障害者だったとして、家を買うことや車の免許を取ることができなかったら、どう思うだろうか。そして、夢を叶えることさえもできなかったら。

昔は、「聞こえない」という理由だけで、制限されていることが多かったそうだ。結婚することもできない。赤ちゃんを産むこともできない。そんなことが当たり前の世の中だった。今の時代では考えられないほど、衝撃的な事実だ。今、聴覚に障害のある人たちがそういうものに縛られずに過ごすことができるのは、今日までの多くの当事者の努力があったからだと思う。

この本の著者の早瀬久美さんは、私と同じで耳が聞こえない。そして、ろう者として初めて薬剤師免許を取得した人だ。久美さんは、一九九八年、薬剤師の国家試験に合格した。しかし、戦後に制定された薬剤師法の「耳が聞こえないものには免許を与えない」という欠格条項が壁となった。その現状を変えるため、久美さんは自分の障害を明らかにして薬剤師免許を申請した。しかし、厚生省から来た返事は「却下」だった。久美さんが中学生の時に薬剤師という夢を持ってから十年が経っていた。「自分の夢をあきらめない強い心が人に届くのではない。伝えることをあきらめない想いの強さが、きっと必ず人の心に届く」そう信じて行動した久美さんの姿は、聴覚に障害のある人たちに勇気を与えたと思う。署名運動により二二〇万人以上の署名が集まり、欠格条項の存在を一般の人にも知ってもらうことができた。当事者の努力が、法律改正につながったのだ。当事者が壁に立ち向かうことは、勇気のいることだ。でも、伝えることで何かが変わるかもしれないと、小さな一歩を踏み出すことで、大きな変化を生み出せるのだと、久美さんから学ぶことができた。

「こころの耳 伝えたい。だからあきらめない」この本は、読む人にあきらめない勇気をくれる本だ。



本当の幸せの意味 (赤地柚香)

[おすすめしたい本]

『桜のような僕の恋人』

宇山佳佑／著

生きていられる幸せ。健康的な生活を送ることが出来る幸せ。家族、友達、恋人…周りの人と笑っていられる幸せ。当たり前のように当たり前ではないことを、あなたは本当に理解しているだろうか。

『桜のような僕の恋人』の映像化が決定し、興味をひかれた私は、中学3年生の春にこの本に出会った。主人公は見習いカメラマンの朝倉晴人と新米美容師の有明美咲だ。互いに恋に落ちた二人だが、幸せな時間は長くは続かず、美咲は人の何十倍もの早さで年をとる難病を発症してしまう。普通ではなくなってしまう生活の中で、登場人物の強い思いや勇気が必要な行動、大切な人との心の繋がりが綴られている。一瞬で散ってしまう桜のような儂い、しかし、美しい恋物語だ。

もしもあなたが、急に今までのような生活が送れなくなったらどう感じるだろうか。あなたの周りの大切な人が絶望的な状況に陥ってしまったらどうだろうか。様々な行動が制限される今、悩みを持つ人も多くいるだろう。人によって、悩みの種類や大きさは違ったとしても、何ひとつ無視して良いものはない。

私自身も中学2年生の終わり頃に体調を崩し、悩みに悩んだ。大好きな仲間に出会えず、高校への進学や、叶えたい将来の夢さえも諦めかけていた。そんな時、この本を読みながら、生きること、自分の幸せ、大切な人の幸せについて沢山考えた。そんな私の心に強く刺さった言葉が、美咲の兄が美咲に放った一言だ。「…1番大事なものは諦めんな」心配や不安で押し潰されそうになっていた私は、この言葉に勇気を貰った。

切ないストーリーの中に、今を生きていられる有り難さがひしひしと感じられる。生きることの価値を改めて考えることができる、そんな物語だ。何もかも諦めてしまいたい時、辛い時、苦しい時、そっとあなたの心に寄り添ってくれるだろう。是非、晴人や美咲と一緒に、本当の幸せの意味を見つけてほしい。